現場レポート

“農と食” 北の大地から

連載第60回

十勝発 「北海道ホープランド」の挑戦

「持続可能な農業」をめざして 担い手育成や交流が次の目標に

ルポライター
滝川 康治

26年前、十勝平野のど真ん中、幕別町の一角で「希望の大地」をめざして一つの農業生産法人が産声を上げた。畑作経営を軸にしながら、観光イチゴ園や農産物の加工などに取りくむ一方で、近年は農業の担い手づくりやアジアへの農業支援活動、放牧養豚などが進行中。補助金や農協に依存しない「自立した強い農業」、自由に作物を栽培する「希望あふれる農業」をモットーに走り続けた、㈲北海道ホープランドの軌跡と実践をリポートする。

十勝平野のど真ん中ですそ野の広い法人経営

十勝川にほど近く肥沃な土に恵まれた幕別町相川の軽種馬牧場跡地。うっすらと雪化粧した十一月下旬の朝、収穫が終わったスイートコーン畑の一角に豚の姿が見える。気温はマイナス一度。日差しが強くなってくると、簡素なパイプハウスのなかで体を寄せ合っていた、数十頭の豚たちが起き出した。餌の置き場に群がってきて、とても人懐っこい。

ここは、農業生産法人「㈲北海道ホープランド」(妹尾英美代表取締役・資本金3000万円)が二〇〇六年に取得したもので、広さは十六ヘクタール。放牧養豚場のほかに、厩舎や乳製品工房、スタッフたちの住宅などがあり、新たな事業の拠点として整備を進めている。

「(多岐にわたる)生産法人の事業は自然発生的に生まれてきたんですよ。自分は自然体でやってきたつもりだけれど、気がついてみると経営面積も大きく、いろんなことに乗り出していました」

と、経営主の妹尾さん(1944年生まれ)が語るように、北海道ホープランドの取りくみはすそ野が広い。

妹尾さんの住宅周辺を中心に、農場の総面積は約百二十ヘクタール。小麦・ジャガイモ・ビート・大豆の畑作四品をはじめ、アスパラガスやカボチャなどを栽培し、帯広市内にあるコープさっぽろの店舗には三十種類ほどの野菜類を提供する。国道38号のそばには、観光イチゴ園や農業研修生のための宿泊施設などもある。農産加工品も開発してきた――。

こうした多角的な経営を、十七人の従業員で切り盛りする。初代農場主がこの地に入植して百年あまり、法人の設立から四半世紀の歳月が流れたいま、北海道内でも有数の農業経営体へと発展した。

米国での実習に触発され大規模経営を志向する

農場の本拠地がある相川地区は、十勝川とその支流がつくり上げた厚い沖積土が広がり、畑作には恵まれたところである。『幕別町史』によると、昭和初期には大根やキャベツ、ニンジン、ゴボウ、長イモなどが作られ、戦後になるとホウレンソウの適地として盛んに栽培されるようになった、と記されている。

地元の高校を卒業してすぐに就農した妹尾さんは、二十代前半のときに農業実習生として米国アリゾナ州に渡り、五百ヘクタールもの広大な土地で野菜づくりに取りくむ農場で汗を流した。

「そのころ(60年代)の幕別は耕作面積が少ない時代でしたが、『やがて、日本もアメリカのようになるんじゃないか』と思った。畑作四品だけではうだつが上がらん。機械化して大規模な野菜生産をすることで、日本のなかで戦えるようにしたい、と考えたんです」(妹尾さん)

その後の日本農業はアメリカ型にならなかったが、規模拡大を進める一方で、七〇年代から、いち早くジャガイモの産直を手がけるなど、販売面でも自立に向けた試みを続けていく。三十歳のときに父親が亡くなり、妹尾さんは名実ともに農業経営の大黒柱になった。

宮城県出身の実習生や渡米仲間だった神奈川県の友人と語り合い、生産から流通までの全国展開を夢見た。資本金一千万円で法人を設立したのは八一年のことである。「ここを希望の地にしたらどうか」という実習生の提案を受け、名称が決まった。その友人が責任者になり「北海道ホープランド神奈川農場」も設立され、独立採算で経営している。

観光イチゴ園を皮切りに加工や消費者との交流も

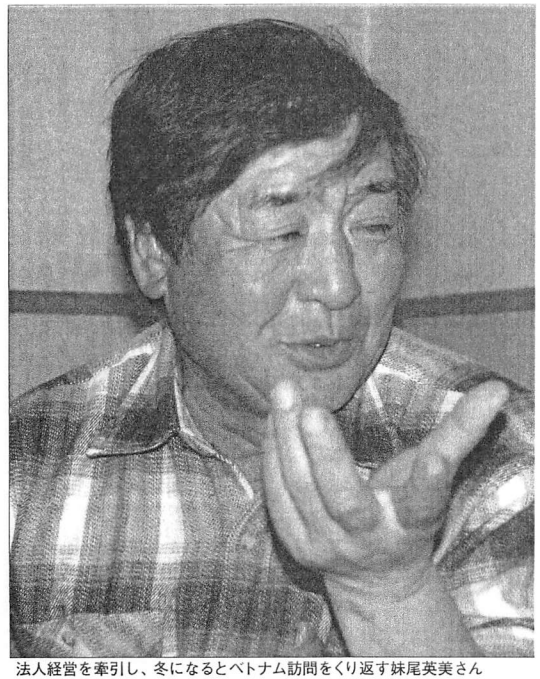
法人経営に移行した妹尾さんは、北海道中小企業家同友会帯広支部に農業経営部会を立ち上げたときのメンバーになる。「部会は地域で頑張っている先進農家の集まり。勉強会を重ねるなかで(新規事業を)何もやらないのが恐ろしく、仲間たちから取り残されるような気がした」

そこで、観光農園を営む仲間からノウハウを学び、地理的な条件を検討し、自宅から一キロほど離れた国道沿いに五ヘクタールの土地を取得した。十アール当たり百五十万円、ざっと七千五百万円の

小豆の収穫作業に汗を流す農業生産法人の若き従業員たち。ここを巣立ち、新規就農した人も多い(写真右・提供=北海道ホープランド)。左上のハウスのなかで休息し、暖かくなると餌に群がる出荷間近の豚。2カ月ほどでスイートコーン畑をすっかり食べ尽くしてしまった(写真下)

多角経営の一つとして、98年にオープンした観光イチゴ園（営業は5月下旬～10月末）。ソフトクリームが人気商品だ

開発したブランド商品には、きな粉や小麦粉、3種類のうどん、豆類、メークインの澱粉などがある



法人経営を牽引し、冬になるとベトナム訪問をくり返す妹尾英美さん

かなり思い切った先行投資である。

九八年、その一角に観光イチゴ園がオープンした。四棟から始めた大型ハウスが現在は十三棟に増え、部会仲間の「あすなろファーミング」（村上勇治社長・清水町）の乳製品と自家産イチゴで作るソフトクリームが人気商品になっている。

十勝は、生産高に占める小麦やビートなど政府管掌作物の比率が六、七〇％と高い地域である。「十勝の豪邸の主は医者か農家」と評する人もいる立派な住宅や農業施設、大型機械がそろった農村風景――それは、行政補助金や農協に大きく依存してきたことで実現したものだ。

北海道ホープランドは設立当初から、補助金や農協に縛られない「自立した強い農業」と、自由に作物を栽培する「希望あふれる農業」をモットーにしてきた。

「農協の大口組合員であり、事業の拡大のためには補助金も活用したが、『そうしたやり方だけでいいのか』という思いがあった。（多角的な事業展開によって）うちの管掌作物への依存率は三〇％くらいになっています」（妹尾さん）

観光イチゴ園に続いて、二〇〇一年から自家産秋まき小麦をブランド化し、小麦粉やうどんの加工販売を始めた。翌年には十勝の農家四人（畑作・畜産各2人）の生産物を使い、帯広市内の北の屋台に「農屋（みのりや）」もオープン（代表は妹尾さん）。こうして、加工部門や消費者との交流などが少しずつ具体化していった。

若い担い手の育成に貢献 ベトナムの農業支援も実践

ここ数年、若い担い手の育成やベトナムへの農業支援活動にも力を入れている。

妹尾さん夫婦を除くと、農場のスタッフや実習生は二、三十代が中心である。一～三年間の長期研修や一週間～半年間の短期研修、数日間の農業体験に若者を積極的に受け入れてきた。トラクターの運転ができる人が少ない悩みはあるが、人手がいる農作業には貴重な戦力だ。

研修経験を積んでから新規就農した若者や、農村青年と結婚した女性も多いらしい。わたしが暮らす道北の下川町にも今春、ここで研修後に帰郷し、新規就農の両親とトマト栽培に励む若者がいる。農業に関わる人材の育成に北海道ホープランドは大きく貢献してきた。

観光イチゴ園の隣に今春、実習生らを受け入れる宿泊施設がオープンした（事業費は3200万円。うち半額は農水省の交付金）。合計八人が宿泊でき、収穫した農産物を共同で調理して自炊生活を送る。加工設備やホールもあり、来年からはこのスペースを使って土・日営業の農家レストラン（夏場限定）の開業も予定している。生産と体験交流がセットになった空間として、「農と食」のすそ野を広げていくことだろう。

帯広畜産大学で研修中のベトナム国立フエ大学の教授との交流などがきっかけで、妹尾さんは五年前から同国への農業支援活動を始めた。ベトナム中部の古都・フエに同大学と北海道ホープランドの共同事業で五ヘクタールの実験農場を造り、野菜栽培や豚・鶏の飼育、淡水魚の養殖に挑戦。その一方で昨年から、野菜づくりを中心にした三カ月間の農業研修に、同大の卒業生二人を招いている。

「ベトナムはいま、市場原理が少しずつ浸透し、うちで研修した人たちが作った農産物が売れる時代になってきた。昨年暮れにはWTO（国際貿易機関）に加盟し、政府は食料供給と人口とのバランスが取れた農業をめざしている。我々はそのモデルをパイロットファームの形で示していきたい。日本農業の轍を踏むことなく、完璧な経済至上主義ではない発展の道をめざしているんです」

冬場に三、四回、ベトナムと北海道を行き来して実験農場で助言などを続ける妹尾さんは、支援活動の狙いをこう説明する。首都・ハノイで大規模なアスパラ農場を造る構想もある。いまは、経済的な面も含めて一方的に出向く形だが、「続けられる間はやっていく。近い将来、共同事業として直売所や焼肉屋を開業する計画もあります」（妹尾さん）

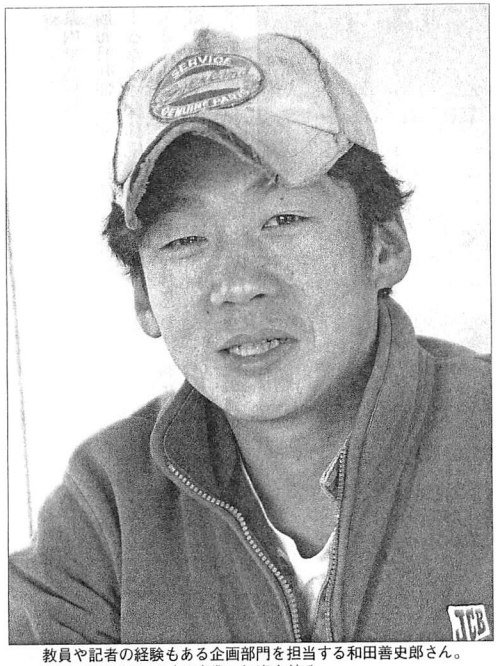
と意気軒昂である。現場主義に徹し、楽しそうにベトナム農業の未来を語る姿が印象的だった。

輪作に〝放牧養豚〟を導入 千頭の飼育が当面の目標

〇六年秋、農場に雄一頭、雌十頭の豚がやってきた。さっそく草地に放ち、放牧養豚がスタート。現在の飼育数は百五十頭ほど、来年は四百頭に増やす。放牧の目的は、豚の糞尿を畑に還元し、輪作体系のなかに組みこむこと。〝豚が耕す農場〟を創ろうというわけである。

若いころから有畜農業に興味があった妹尾さんは、いつか畑作のなかに畜産を取り入れたい、と考えてきた。

「ヨーロッパの畑作は六百年の歴史があるが、それができたのは有畜農業だったからです。イギリスでは豚を放牧したあとに、ジャガイモ→小麦→牧草→休閑地といったローテーションを確立してきた。北海道はわずか百年の歴史にも関わらず、化学肥料の過剰投入に頼った連作を続けたために、土地が疲弊している。原点に戻り、これを回復させるには有畜農業を避けて通れません」（妹尾さん）



教員や記者の経験もある企画部門を担当する和田善史郎さん。「ふれあいファーム」の事業に知恵を絞る

たどり着いた結論が放牧養豚だった。六年前、イギリスの農機具ショーを見学した機会に、いくつかの放牧養豚場を訪れた。親子三人と二、四頭の〝牧豚犬〟とで一万頭の豚を飼育し、畑作を営む姿を見て、手応えを感じた。

アニマルウェルフェア（動物福祉）の面から放牧養豚に関心があったわたしは、先月号の取材で宮城県を訪れたとき、北海道ホープランドの企画担当・和田善史郎さん（73年、兵庫県生まれ）と出会った。それが、今回の取材のきっかけである。

道内外で放牧養豚に取りくむ人は少数ながら現れているが、多頭数を飼育し、輪作体系に組みこんでいくという点では、ここが最先端ではないかと思う。

産まれた豚は、畜舎や運動場のなかで母豚とすごし、生後二カ月で親離れすると徐々に放牧へと移行していく。

「豚を屋外に出してから病気にかかったのは一頭もいませんね。餌の中心は自家農産物で、配合飼料の給与量は二、三割程度。来年からは、規格外の農産物を農協から提供してもらう予定です」

と、和田さんが話す。動物の生態や習性に適った飼い方なので、ストレスが少なく、健康な豚が育っている。

豚は生後八、九カ月で屠場に送られ、食肉にされる。取材時は初出荷の直前、

「どれを最初の一頭にするか、複雑な気持ちだよ…」(妹尾さん)と、心優しいところをのぞかせていた。すでに〝放牧豚肉〟の引き合いが相次いでいるというから、順調な滑り出しといえるだろう。

「とうとう畜産の世界に入ってしまったけれど、養豚を軌道に乗せ、お客さんの評価に応えられる良質のものをつくりたい。(肥育豚で)千頭を飼育して通年出荷することが当面の目標ですが、三年後くらいに実現できるんじゃないかな。その次の目標は豚肉を加工し、生ハムやベーコンを製造することですね」

と、妹尾さんが意欲を見せる。畜産に明るい者がいないので、専門知識を持ったスタッフをどう確保するか――課題は尽きないが、やり甲斐のある事業なので逸材を得られるのではないか、と思う。

宿泊施設やフリースクールで体験交流の農場めざす

北海道ホープランドはいま、前出の牧場跡地を活用して「都市と農村ふれあいファーム」を創る事業を進めている。

この事業の一環で放牧養豚が本格化する一方、牧場の一部を「有機農園」として市民に開放し始めた(5坪/口を6口まで。年間利用料は1万円/口)。六棟ある厩舎の一つを、長期滞在が可能な宿泊施設にリフォームする計画もあり、資金をやり繰りしながら準備を始めている。

事業の中心スタッフは和田さん。兵庫県内で高校教員を四年間やったのち、十勝毎日新聞の記者になって幕別町を担当するなかで、「農屋」の店長だった妻の恵美さん(73年生まれ。妹尾さんの長女)と知り合って結婚。二年前に農場の実習生へと転身した。そんな異色の経歴を生かしながら、不登校や中途退学などで引きこもりがちな若者を対象にした農作業が中心のフリースクールを、同ファームのなかに開設する構想も思い描く。

「……今、農業に『癒し』という新たな役割が与えられています。豊かな自然、おいしくて安全な手料理、ゆっくりとした時の流れは、人を和ませてくれます。『生きるために土を耕す』『生きるために動物を育てる』。厳しい自然と向き合い、その変化を持ち得る知識と感覚を研ぎ澄まして感じ取る。汗を流して作物を育て、収穫を喜び、大地に感謝する。食物連鎖の中で犠牲になった家畜に生命の尊さを学ぶ。ただの観光ではなく、農業体験は人間の本能を呼び覚ますという点で、一時的な癒しとは違います。『人が原点に戻る』。現代人が農業にそれを求めているような気がします。……」

07年7月、放牧場から脱走した母豚が草むらで10頭の子豚を出産。
物置の陰に草を敷き詰め、分娩場所をつくっていた(提供=北海道ホープランド)

北海道ホープランドのホームページのなかで、こんなメッセージを発信する和田さんは、「フリースクールを軌道に乗せるには十年、二十年かかるでしょう」と話す。ライフワークになりそうだ。

法人経営を牽引してきた妹尾さんは、もうすぐ六十代半ばになる。持ち前のバイタリティで東奔西走してきたが、次の世代への継承について、こう語る。

「これほど急速に世界の食料不足や温暖化がやってくるとは思わなかったけれど、農業には逆にチャンスがいっぱいある。これからは、若い世代と協力し合う体制をつくり、互いの価値観を認めながらやっていきたい。それが法人経営を成功させるうえで大事なことでしょう」

恵まれた土壌と立地条件の下、畑作を軸に多様な事業を有機的につなげ、いち早く消費者の志向をキャッチした。仲間や異業種の人たちとのネットワークを構築した――北海道ホープランドが発展できたのは、こうしたことを一つずつ積み重ねてきたからだろう。これまでに培った数々のノウハウを生かし、多くの若い人たちが育っている姿を見ると、明日の北海道農業に希望が持てる。

■農業生産法人 ㈲北海道ホープランド
幕別町相川143-4
☎0155・54・5477
FAX0155・54・5432
http://www.hopeland.jp